

の本業と、ボランティアで民生委員、児童委員。

松山市民生・児童委員協議会の身体障害者福祉部会の会長さんを二期目のお務めをしておられます。趣味とかは別に大してごさいませんが、せっかくシベリアから生きて帰った命を大切に、民生事業に心を捧げたい信念で生きておられます。息子さん二人もそれぞれ独立され、奥様と二人で社会のために静かに尽くしてゆくつもりだと承っております。

また、全国強制抑留者協会愛媛支部のためにいつも御協力を賜っていることにお礼申し上げます。

(愛媛県 山本 繁夫)

シベリア抑留記

愛媛県 長谷川 三郎

大正十二(一九二三)年四月二十一日、愛媛県喜多郡長浜町で出生。昭和十三(一九三八)年三月、喜多尋常高等小学校高等科卒業。四月、西宮市、中陽消費

組合に就職。支那事変による物資不足等により将来に不安を感じて二年後に退職。昭和十五年三月、満州国新京(長春)市、東京無線に再就職しました。

昭和十九年八月一日、満州国間島省間島、満州第一六六一四部隊に現役兵として入隊しました。一期の検閲後、佳木斯の野戦航空修理所の教育隊に移動し、一式戦闘機整備の教育を受けた後、昭和二十年二月に敦化の第五航空軍二〇〇飛行場大隊に転属しました。

その後三回の移動で、昭和二十年五月、北朝鮮温井里飛行場に移動。ここでは、ソ連との開戦に備え特攻機の燃料と爆弾の補給が主な任務でした。八月九日ソ連が参戦し、北朝鮮日本海側より侵攻の報道が刻々と伝わってきました。補給中隊には小銃はなく、ソ連軍の自動小銃に対して帯剣だけで応戦するしかなく、どう考えても勝てない戦いが目前に迫ってきました。明日はどうなるか分からない事態の中で、期待していた特攻機は燃料の補給には一向に来ず、絶望感が増す中で八月十五日を迎えました。

八月十五日朝「重大放送」があるとのことで、将校

は集合、下士官、兵は待機と命令が出ました。正午過ぎ、日本が敗戦したことを知らされた。その瞬間は助かったという思いがあったものの、その後は、神国日本が敗戦したことで複雑な感性となりました、自暴自棄の毎日でした。数日後に武装解除になりました。

九月初旬にソ連軍の軍使が小型飛行機で来て、飛行場をソ連軍が使用するので、それまでの間、日本軍に飛行場警備の要請がされました。

しかし、日本軍は武装解除したため警備に必要な武器がなく飛行場の警備はできないと回答したそうです。軍使は日本軍の武器を支給するからと、支給場所と日時を決めて帰りました。武器が支給され、飛行場の警備ができる。元の日本軍に蘇った気分になり、武器の支給を待ちこがれました。

九月中旬、武器の引き取りの日の朝八時、トラック三台に積み込み要員十数人が乗り込み指定場所に出発しました。武器を積んだトラックの帰りを期待して待っていたら、正午過ぎにトラックとソ連兵十数人を乗せた軍用車が戻ってきました。想像もできない予期

せぬ事態が起こりました。

到着したソ連兵は自動小銃を肩に直ちに表門と裏門に立ち、自動小銃を数発発射して威嚇しました。この素早い行動と威圧的な発射音に震え上がりました。

「ここを一時間後に出発」とソ連軍より命令が出た。予期せぬ事態の急変に混乱状態になり、何とか食糧と被服を背囊と雑囊に入れて、一時間後に温井里飛行場を行き先不明で出発しました。この時、シベリアに連行されるのでは、との恐ろしい予感が五官を走り抜けました。ソ連軍軍使の飛行場警備というのは真つ赤な嘘で、逃亡防止の方便でした。

これがソ連軍にだまされた一回目の出来事です。途中で日本軍の小銃を持った数人の朝鮮人に検問を受けました。行進中の食事は朝鮮人の家に寄って、物々交換で飯を炊いてもらい漬物で食事をする毎日でした。

数日して三合里の収容所に着きました。この収容所は日本軍の兵舎が使われていました。既に多くの人が囲いの中にいて、下士官と兵隊はこの収容所で、将校は別の収容所に連れて行かれました。

ここに来て一カ月ほどして、帰国のためと称して貨車に乗せられ、興南駅に着きました。ここの収容所は会社の寮を使用しており、レンガの建物で、六畳の部屋に十数人詰め込まれ、周囲は有刺鉄線で囲まれ、望楼から警戒兵が監視していました。有刺鉄線には近寄らないようにと注意がありました。数日して夜間に警戒兵の自動小銃の発射音がドンドンと聞こえ、有刺鉄線の近くにいた日本人が射殺されたことを知りました。ここに来て初めて捕虜収容所の厳しさと空しさを痛切に感じました。

食事は澱粉で作っただんご二個と、澱粉と大根葉のスープを飯盒の蓋一杯が一日分の食事で、空腹のため毎日寝ていました。食事が少ないので便所は三、四日に一回でした。

十一月中旬に関東軍の防寒着が全員に支給され、「年末になって日本に帰るので冬服の温情的な支給だ」「いや、シベリア連行のための支給だ」等の噂が流れましたが、私は疑う余地もなく帰国を信じていました。

十一月下旬、興南港へ出発しました。港には大きな貨物船が停泊しており、しばらくして乗船が始まると、船内放送が「ヤポンスキ東京ダモイ」と、期待していたとおりの放送に安心したものです。タラップから船腹に下り、やっと座れるだけの状態で、船酔いのため身動きもできない状態でした。二、三日もすると船の速度が遅くなり、衝撃による振動を感じ甲板に上って状況を見ると、一面氷塊の中で船はゆっくりと動いていました。日本に帰るのに見渡す限り氷塊、この状況に一抹の不安を感じたものです。

数日して左舷遠くに雪山が見え、そしてナホトカ港に着いた時にはシベリア抑留が現実となり、悲愴な思いで下船しました。酷寒のシベリア連行がいよいよ始まりました。乗船した時の船内放送「ヤポンスキ東京ダモイ」を信じて乗船した私達には二回目のだましとなりました。

海水で米を洗い、飯盒で雪を溶かして飯を炊き、塩味のついた飯で夕食をすまし、野宿地へ向かって月明かりの雪原を黙々と行進が行われました。数時間後に

小高い谷間の野宿地に着きましたが、付近には暖をとる新にする物は何もなく、携帯天幕を張り、毛布で周囲を囲うだけのものでした。雪原のシベリアで第一夜の野宿を十数人が一かたまりとなって過ごしました。酷寒の厳しさに凍傷の心配があり、一晩じゅう手足の指先を摩擦し、一睡もできない野宿でした。後日、ここを地獄谷と呼んでいたことを知りました。

夜が明けると二日目の行進が始まり、日暮れに谷川沿いの野宿地に着きました。全員で焚火する雑木を集め、一晩じゅう焚火をし、飯盒で飯を炊き塩をふって夕食をとり、背囊に腰をかけ焚火を囲んでの野宿でした。

しかし、生木を燃やすので煙いのと、火の粉が飛び服に火がつく心配があり、寝られるような状態ではありませんでした。このように野宿では毎晩生木を焚くので目が開けにくくなり、雪原の行進がまぶしいので目を閉じると、毎夜の寝不足のため居眠りしながら歩く状態でした。

歩む方向からそれると、後ろの人に肩を突いて起こ

してもらうことがたびたびでした。毎日の行進の疲労で隊列より遅れて歩くと、ロシア人の泥棒三、四人に囲まれ、防寒帽子、防寒手袋等をはぎ盗られ、警戒兵は泥棒を見ても知らぬふりをし容認しているので、泥棒はどこまでも追って来る。酷寒のシベリアで防寒帽子、手袋等を盗られると凍傷になるので、隊列に遅れないように歩いて行くため全力で歩きました。

食事は一日一回、野宿の時に炊いており、一日分の米を飯盒で炊き、三分の一を食べて三分の二を翌日の朝食と昼食にしておりましたが、翌日になると凍って雪を食べると同じことで、次からは野宿の時炊いた一日分の飯を温かいうちに全部食べて、翌日の朝昼の食事は、雪原の表面の雪を手でふるいよけて雪を食べました。一日一回の食事と睡眠不足と目を閉じての行進で、疲労が極限の状態となりました。

数日後に到着した収容所は山間部の作業場の近くにあり、木造の古い建物の中が二段に仕切られ、電気、水道はない。暖房は薪ストーブ一台で、水は谷川まで汲みに行く。入浴の設備はもちろんなく、電気もない

ので、朝晩の食事ときは松やにを採ってきて明かりに
していました。食事は、雑穀の雑炊で飯盒の蓋一杯を
一日二回。空腹の毎日で寝ておりました。

一カ月ほどして作業に出るようになりました。作業
は森林鉄道の建設現場でした。径一メートルほどの原
生林の木を二人挽きの鋸で伐採した跡に鉄道敷のため
の盛土作業です。私達は盛土の作業で、凍った地面を
槌と矢で石を割るように割って運びました。食事は雑
炊が一日三回になりましたが空腹には変わりなく、酷
寒の雪山の作業が続きました。関東軍の防寒着は保温
性がなく土木作業には適せず、手足の指先が動きにく
くなる凍傷になるので、指先が回復するまでさすっ
ていました。作業と凍傷予防処置との繰り返しは作業
を遅らせました。ノルマ達成が三〇%以下だと班長が
指摘され、作業員の食料を減らすと言われたこともあ
りました。

以上のような状態で体力も衰え、一生帰れないとい
う噂も流れ出したとき、四十過ぎの召集兵の方が亡く
なられて交代でお通夜に参加したこともありました。

明日は寒いシベリアの凍土に埋葬され、永遠に帰国で
きない、哀しい思いに人ごとと思えず、抑留以来気丈
に過ごしてきた私も初めて涙が出ました。翌日、戦友
が凍土を掘って埋葬しました。零下三十度の雪山での
重労働と飢え、一生帰国できないという噂に絶望感の
毎日でした。

ある日、各人の職業の調査があり、二十一年五月に
ウラジオストック第七収容所に移動しました。工場内
にある収容所で、作業は工場で電気の作業でした。

民主運動の勉強会が始まり、勉強会への熱心な参加
者とそれ以外の人達との対立が日に日に激しくなり、
衝突寸前にソ連側が仲裁に入ったこともありました。

ここで『異国の丘』を覚え、夕食後のひととき歌って
おり、全員の合唱になると警戒兵に中止させられまし
た。

二十二年四月にウラジオストック第二収容所に移動
させられました。ここの収容所は貨物船二隻の収容所
で、一隻は集会所と沿海州地方の思想教育の本部があ
りました。各収容所より受講生が来て、三カ月の教育

を受けていました。集会所では時々集会があり、将校や憲兵、その他の反動者等が反動分子として吊るし上げられ、収容所全体が思想教育の厳しい状況でした。

やがて待ちに待った帰国の日が来ました。昭和二十四年八月初旬、ナホトカ港より大郁丸に乗船し舞鶴港に上陸、八月二十四日、復員しました。

当時の過酷な極限生活は五十年過ぎた現在でも思い出し、一生忘れることができません。

酷寒のシベリアで亡くなった多くの皆様のご冥福を心よりお祈りいたします。

【執筆者の紹介】

長谷川さんは大正十二年四月に、愛媛県の長浜町（瀬戸内海に面した静かな町、松山市から西へ約一時間、人口一万一千人）で生まれました。

高等小学校を出てから西宮市の甲陽消費組合へ就職しましたが、本文中にあるような事柄で大陸にあらがれて渡満し、入隊するまでの四年半を新京で働き、青春時代を暮らしました。

抑留中は主としてウラジオストク付近にて転々として各種の労働につき、昭和二十四年八月に帰国、丸々九年ぶりに両親と兄二人とお姉さんに会うことができ、夢のようで、すっかり変わった故郷に浦島太郎のような気分になり、よくまあ九年間、見知らぬ外地と異国での苦勞に打ちかつことができたと思われたそうです。

根が勤勉で真面目で、脇道を通ることの嫌いな方で、帰国して間もなく、国家公務員として、建設省大洲工事事務所に奉職し、息子さんは松山市で独立し、お嬢さんは大洲市に嫁いで、それぞれ楽しい家庭を築いているとお聞きました。今は奥様と二人きりで静かに新聞を読んだり、『財団だより』や『平和の礎』を読むのが楽しみで余生を送っておられるそうです。愛媛県支部の会員であり、慰霊祭その他ではいろいろとお世話様になっております。御健康をお祈りします。

（愛媛県 山本 繁夫）